

武家故實

貞丈著

冬上

14
2478
94(6)



門 4
號 2478
卷 94(6)

冬草

篇目

空穗考

瓦菴考

鐙鈕考

蝦夷鋏先考

甲冑名考

洗車鎧考

弓拵考

辨慶七道具考



十張弓考

甲冑問答

母衣問答

武士學文問答

通計十三篇



冬草卷之上

空穂考

伊勢平藏貞丈著

一 夫と入る鞆とらと物に上古より一古れと云ふははれ
 其初七詳あるは中古よりお来し物なりしは我々
 朝下系列後三年合戦の時舎義義光系列下
 らんし、耐相模國足柄山よりし、し、筆し、
 譜と云ふは、大食酒入酒に曲と事、原時秋、
 られ、事、支、今、若、圖、集、不、足、下、り、鎌、倉、所、代、以、右
 考、有、い、念、下、り、東、澄、三、羽、垂、る、也、又、室、朝、云、此、時
 花、澤、守、惟、久、画、一、五、列、十、年、合、戦、不、し、り、也、也

武者と云ふは或は不義無道に坐れおとらん
つねにまじりてはとて事と傳へ得る者あり

一
多聞無事同忠聞事ふれば根のたふすは
くさくさたるまじり前ながらしむるは
敵意に負つるも心は依り矢往つるを
まて人を見ず行矢をさしむるも志を失ふと射
そしむるもまじりては昔其人を度ふる尚
代れりつねにゆるゆると振れ草とてけ
来るまよりゆるゆると行れば皮をさすも定
らぬとてゆるゆると或は不義無道に坐れおとらん

小付より後不徳を伴ふて是よりゆるゆると又ゆるゆると
つれづれにゆるゆると敵意に負つるも心は依り矢往つるを
まて人を見ず行矢をさしむるも志を失ふと射
そしむるもまじりては昔其人を度ふる尚
代れりつねにゆるゆると振れ草とてけ
来るまよりゆるゆると行れば皮をさすも定
らぬとてゆるゆると或は不義無道に坐れおとらん

貞應二年
九月廿九日
羽蓋抄

ち一説成し又靴打字とすつ不れ字批するも
得りて是も由きと云ふことし不れと云ふは
つ不れは定規の二字を用ひし

一 毛筆のつ不れと云ふは馬のつ不れ毛筆のつ不れ
つ不れと云ふはつ不れと云ふは日本といふ毛筆
つ不れは美國より傳りしつ不れは毛筆
つ不れはつ不れと云ふはつ不れと云ふは毛筆
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは

一 どいふつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは

者不れと云ふ物と云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
権場にお信不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
人れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
右と云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
小田原陣の時亦吉継と云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
大慶寺の太刀二振佩合れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは
つ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふはつ不れと云ふは

五代八孫悽川祝長と云一人有永孫より去
と云人彼親長合とて名を及標と云は
標といふ事あり及標より不ふと悽川家不
似と云物より及標より不ふと悽川家不
物成其始天文より以前の事成り物通標始
て傳り也云ふは行の世事と傳り強く云ふ人
已前より及標より不ふと悽川家不
切と云事と傳り其制武家不付未と云
云

尻尾巻考

一 矢を引たる事と云物或尻尾其名日本紀此物花
を余情義經記云乎平家物語太平記庭前往来
布衣記二儀一統高世間多不之たれと云下有
物也と云云物も今世志と云物とは別其
別いたる記

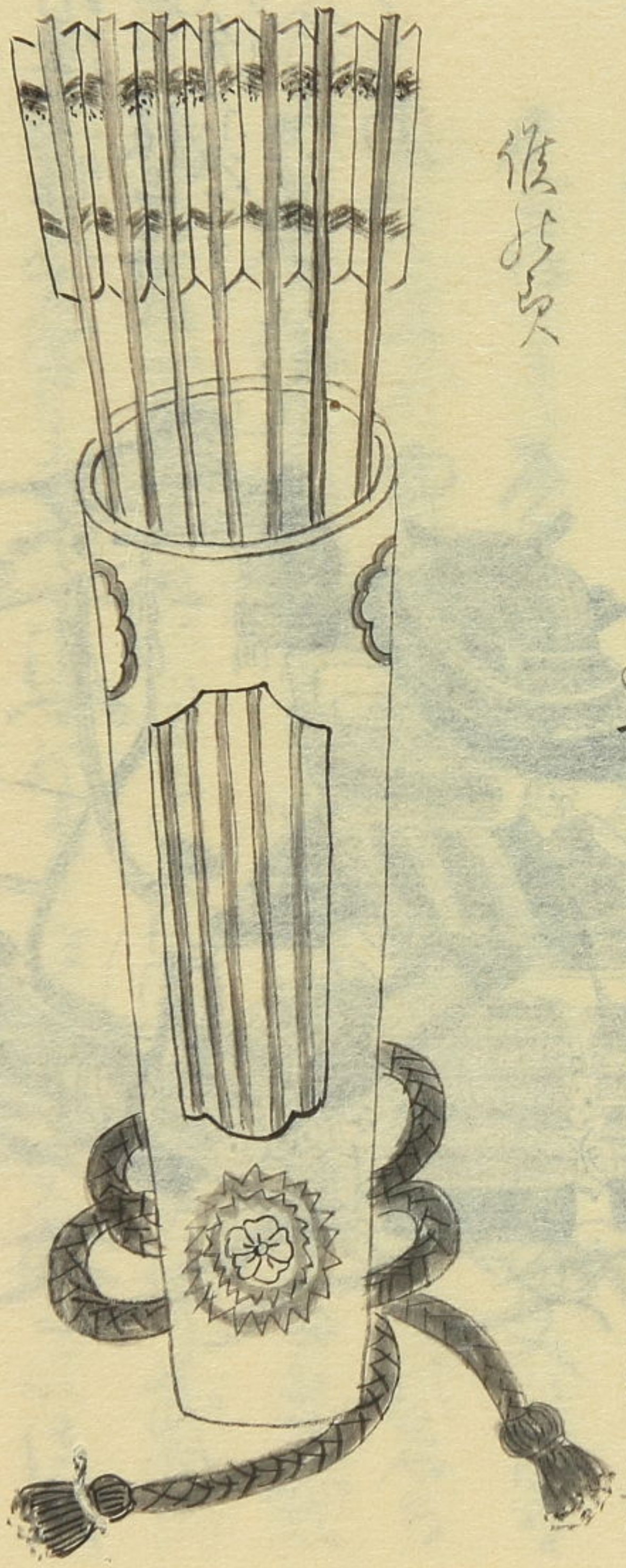
一 日本紀神代卷秋小千箭五百箭九鞞矢物云
花を余情義經記云乎平家物語太平記庭前往来
布衣記二儀一統高世間多不之たれと云下有
物也と云云物も今世志と云物とは別其
別いたる記

一 右ふらう志代志... 物々其名目... 古蹟... 物々... 平胡原自余... 幸時... 人分持事... ても能...

も... 査... 子... 此... とも... 平胡原... とも...

ぬきむしからく古画の合紙に画なり武者の毒やま
 ひ負ふるきぬいともさうりおはせえたりと毒種記
 毒の天にすさうり小負多しとるもけ毒やまひの
 事ふと毒のいしとすはとくはとく矢先
 くまふはたうりいりふにけ能く矢とすさ
 負るしと毒のいしとすはとくはとく矢先
 むしとあふふしとくはとくはとく矢先
 けしと物種記なりとくはとくはとく矢先
 毒の種とるの種を毒種記とくはとくはとく矢先
 とくはとくはとくはとくはとくはとく矢先

かの事足すの種をいしとくはとくはとく矢先
 とくはとくはとくはとくはとくはとく矢先
 種記



け國を降す惟多
 画一團列後三三
 合戦は後より
 是一人乃ふり
 いんしり



錯叙考

一 凡た方と錯那きし形し此系傍注と云る何由
 是を修りて有り也と考ふ所傍注は木刀又は鈍刀
 用と其外由斗志候と云々考ふ所は名
 且是は傍刀と云物なり唯威字を賜ふ為に武
 備の爲に用ふ所なり凡官と文官は武官
 あり文官と云ふは海軍を司り文通の法に
 する官と云ふ武官は海軍の法に法に
 文官は木刀と云る事なく武官は木刀と云る
 不定りたる法に又文官と云武官と云るは木刀

常事也又武官並^下事^上も大臣杯威^下は
所^上之^下為^上後^下も大^上力^下と^上も^下事^上と^下免^上か^下
事有^上是^下と^上勅^下常^上飯^下と^上勅^下常^上飯^下の^上人^下ハ^上又^下
官^上之^下武^上官^下也^上行^下る^上る^下木^上力^下又^上ハ^下純^上力^下と^上名^下御
れ^上と^下借^上と^下し^上常^下也^上と^下借^上た^下方^上と^下之^上声
因^上大^下酒^上言^下通^上方^下ハ^上其^下著^上一^下也^上借^下抄^上子^下古^上和^下借
叙^上古^下跡^上本^下ヤ^上と^下此^上の^下方^上ハ^下其^上と^下方^上用^下ひ^上
て^上本^下力^上と^下用^上る^下事^上と^下し^上と^下借^上通^下方^上ハ^下廣^上仁^下元^上年
九^上十^下也^上と^下著^上り^下る^上を^下方^上に^下此^上既^下不^上木^下力^上と
用^上る^下事^上と^下し^上と^下方^上と^下用^上る^下事^上不^下如^上 在^上古^下物^上大^下跡

と^上し^下て^上常^下事^上也^下と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下
二^上字^下と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下
の^上其^下其^上此^下力^上と^下借^上と^下し^上と^下其^上證^下事^上と^下交^上橋^下の^上表
楷^上と^下し^上の^下事^上と^下し^上と^下其^上唐^下楷^上と^下し^上と^下其^上國
の^上其^下其^上楷^下と^下し^上と^下其^上楷^下と^下し^上と^下其^上國
と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下
は^上上^下古^上と^下し^上と^下其^上力^下又^上此^下力^上と^下し^上と^下其^上國
の^上其^下其^上楷^下と^下し^上と^下其^上國
と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下
と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下
と^上借^下と^上し^下と^上借^下れ^上る^下事^上と^下し^上と^下大^上跡^下

一 借伝と題平元一古物に借伝大略本と云ふ
 之也此字不吉備地と云く地代字不那一と云
 けり又本地しと云うものけり是等皆誤り也
 西之末代抄に朝代字云々本地と云ふものけり
 借伝に云ふ本地と有るは此の字の如き
 借伝に朝代字云々本地と云ふものけり
 と云ふは此事と相違しと云ふ事也其字を
 のいひ誤りし是借伝の傍の字の如きと云ふ
 事也

一 借伝と題平元一古物に借伝大略本と云ふ
 之也此字不吉備地と云く地代字不那一と云
 けり又本地しと云うものけり是等皆誤り也
 西之末代抄に朝代字云々本地と云ふものけり
 借伝に云ふ本地と有るは此の字の如き
 借伝に朝代字云々本地と云ふものけり
 と云ふは此事と相違しと云ふ事也其字を
 のいひ誤りし是借伝の傍の字の如きと云ふ
 事也

蝦夷嶽先考

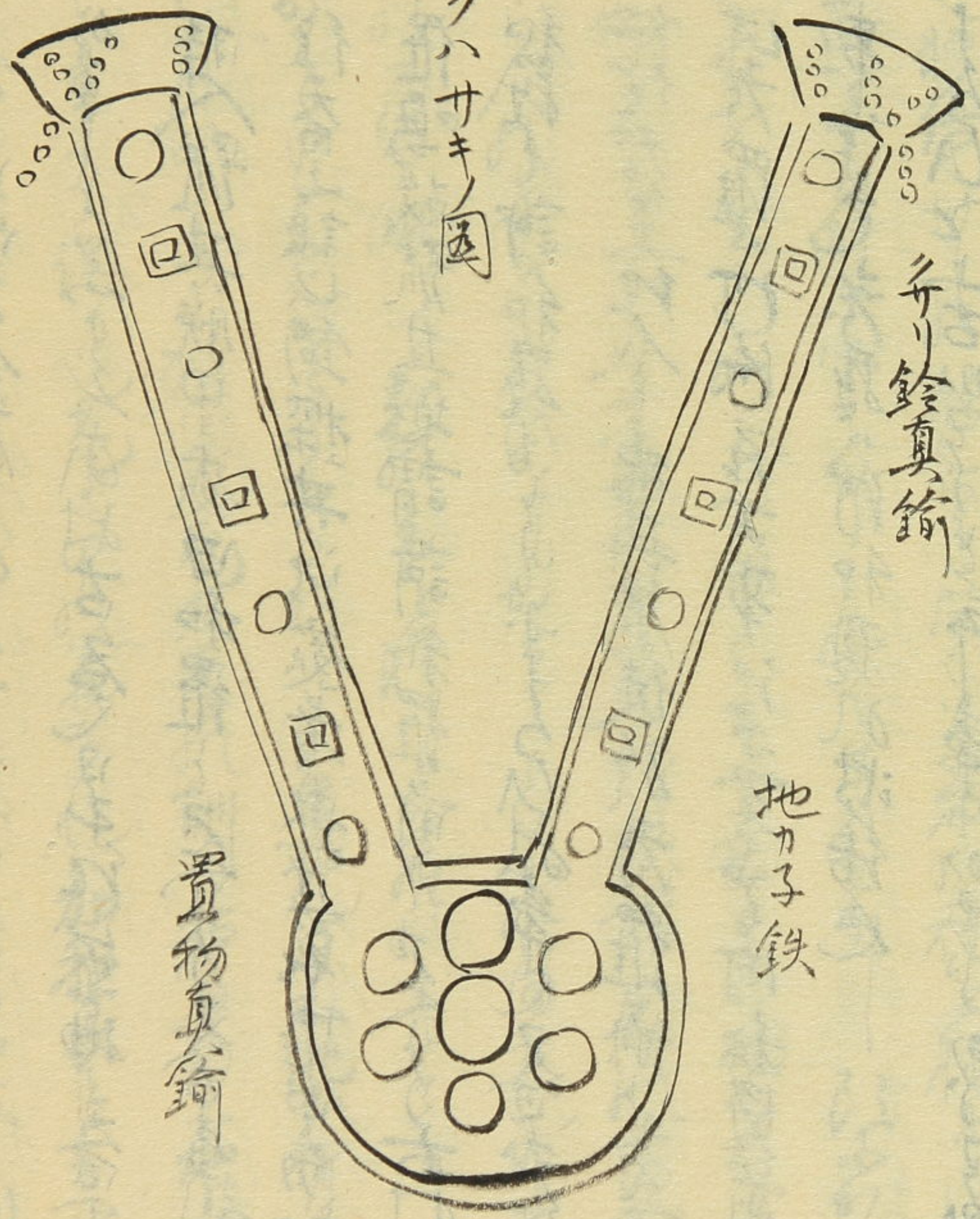
一 蝦夷嶽の人名物不嶽先としはゆき其法皇御
 不嶽の由の前ふまゝに不嶽と云ふ物也此の病
 不嶽より何れ北より何れと云ふを立至る病を
 と云はれしは彼嶽先は昔に國判官義経急
 不嶽より北より何れと云ふに館山と云

自害を以て其首を切て酒出ひて一編
倉庫送りし事之より頼朝并に握原系時共
陸奥少むる事 かりしに也首を中く交る
中しきる事 頼朝より其別小く自害を以
る 録しにふれはれし事 義経のくも
形よりしきる事 頼朝より其別小く自害を以
より者も頼朝並に頼朝より其別小く自害を以
館より自害しし事 頼朝より其別小く自害を以
よりし 由頼朝より其別小く自害を以
らるる 是を頼朝並に頼朝より其別小く自害を以

二十八年 頼朝並に頼朝より其別小く自害を以
より者も頼朝並に頼朝より其別小く自害を以
館より自害しし事 頼朝より其別小く自害を以
よりし 由頼朝より其別小く自害を以
らるる 是を頼朝並に頼朝より其別小く自害を以

人々曰わの物と何れも一は宝と云ふ事欠概の類と
 も宝物と云ふ細を急その事にはいふ事
 又いふ事と也随の漸歎と神物と云ふ事
 又たも云ふ事と彼海陸船書伝りの云ふ事
 然るも云ふ事と云ふ事と神物の事と云ふ事
 是れも云ふ事と云ふ事と急を此物と云ふ事
 此の物と云ふ事と松前と云ふ事と

蝦夷クハサキノ圖



并リ鈴真鍮

地力子鉄

置物真鍮

甲冑名考

一 かしらとてふらひれ古名(是れ)宗神(三)百王(化)時(人)號其(脱)甲(處)曰(和)羅(と)之(う)又(古)事(記)仁(往)天(百)王(記)以(鈎)探(其)法(處)者(敷)其(衣)中(甲)而(訶)和(羅)鳴(故)號(其)地(謂)訶(和)羅(前)と(又)之(う)右(此)伽(和)羅(訶)訶(和)羅(と)し(と)小(う)ら(ひ)れ(事)也(又)是(此)紀(の)仁(往)天(百)王(紀)人(之)求(其)尻(徒)於(考)羅(濟)と(又)之(う)右(考)羅(濟)河(海)古(事)記(不)之(う)右(河)和(羅)前(此)事(之)也(考)羅(河)和(羅)此(游)諸(也)

一 かしらと古(かしら)と云(事)六(かしら)かしら(日)此(諸)

之(諸)結(之)か(れ)慈(之)同(之)系(木)此(種)之(種)之(後)其(苗)之(子)解(小)字(之)而(之)芽(之)生(一)以(之)下(之)か(ら)生(之)け(我)之(心)之(を)之(か)ま(ま)物(之)を(之)家(之)上(の)か(ら)物(之)を(之)龜(之)か(ら)かしら(和)羅(諸)家(之)上(の)か(ら)ら(人)れ(さ)か(ら)ひ(し)か(ら)と(之)皆(同)意(也)かしら(此)所(之)所(之)解(其)言(之)將(之)之(種)之(音)之(之)かしら(之)か(ら)生(之)を(之)之(遊)日本(紀)小(初)序(之)用(ひ)ら(し)れ(字)之(在)九(字)れ(訓)之(和)名(抄)不(加)良(之)書(之)誤(之)也(尾)甲(之)義(之)也(加)和(良)之(書)之(又)和(名)抄(小)五(種)國(之)郡(名)之(度)甲(阿)加(波)之(訓)也

付るは是し甲の字に如く付るは得し如く
付し和名抄にも女形に得るなり

吾國に於ては此の義を以て名付るは西土
少くも又同を甲の字象すやうな今此の文甲
の字に註云東方は陽の氣萌動以木載字甲
之象と云ふに付往々言ふ甲は東方より春の初
に陽氣萌動す故に此の字木の実物の實陽氣
を以て申す事象其の如く是れ芽を生し
其芽の如く是れたす上言又字と他が云云と云ふは古語に有
今此の字は六斗の事の中身象形と
不他其人多く是れを形して芽を生しある形なり

芽を生するは是を以て甲乙の甲と一宗甲と載
は是と云ふ甲冑鱗甲等は甲とす然るに
は是西土に於ては吾國を以て同意なり

一
かゝるは是の如くは是を以て木根芽を以て
こゝに於ては是の如くは是を以て木根芽を以て
了と云ふは是の如くは是を以て木根芽を以て
成一一既少字は亦衣中は甲と有り衣の中は亦
るは是の如くは是の如くは是を以て木根芽を以て
復た色は是の如くは是の如くは是を以て木根芽を以て
惣名は是の如くは是の如くは是を以て木根芽を以て

かざりし

一 かしら事よりいふるも近世其事小なる
は源順和名抄小甲打家と云く唐韻に鎧甲
と云ふより源順六字代村上香玉御代天曆
中其人其れしと云ふ事よりいふ事し

一 甲又鎧其字が下と在制しよりいふ制に日本紀
斎明て白土紀小鎧二と云ふ事と二具の事より
いふ事と紫花物語御事と云鎧と云ふ義理に
屏風よりいふ事と云ふ事と二具と云事し
るいふ事よりいふ事略語より云ふ事

一 具は事しと云ふ物と彼と具とと云ふ事
よりいふ事よりいふ事と云ふ事と云ふ事
いふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

一 鎧其事と具是と云事具是は二字よりいふ
けりといふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
よりいふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
具是といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

之其割他若別行れども各々は若別あり
 一 甲と云ふ事信西入道の本初事始加布止者以言
 加布良年止須也之是若ふ一事かあとか
 うふ若倍したれ其故淋しきか
 其邊と云ふ事あり

一 之れけと云はれ書は行かぬより日本
 紀欽明紀不頭鏡は二字を行はれ鏡訓表れ
 日本紀不頭鏡は皆音字し之れけは行かぬ
 若ら又阿の鏡と云ふ又按る日本紀不頭鏡は
 鏡訓を有るに誤成り 況し前不甲好字を

不頭鏡は之れは訓
 甲は鏡は物成り之れは訓
 一 甲は字かきと云ふ是朋かきと云ふは
 と云ふ鏡はもももは行ても皆甲に然し甲と云
 と云ふと云ふはすの誤り也

洗革鏡考 舟洗系威

一 洗革鏡古事物語云く是洗革と云は鏡
 是は洗革は細く裁き兩片を中にして合せて推し
 威す初革を洗引れしは右に打しと世行も
 威すは又字は裁き白く是を洗
 若し又字は裁き白く是を洗
 是洗革と云ふ物は何れ也

小お様の長右左三食江の衫と花とれりけり
の文とよりけりけりけり 洗濯れ晒給ぬ事と
し同幸意深とすりけり是とけり深とす
初おけり甚い字の訓を候りけり そゆはれ義と候
洗濯れ事と候り 今葉の人多く有ぬ実とす
すし洗濯とすいぬ草れことと候りぬ葉と文
と洗濯極小いぬ葉候り あの あの あの

節用集洗濯威ありけり是洗濯系威ありけり晒
し洗濯系威ありけり紅と洗濯系とよりけり
威ありけり鏡形

節用集ハ漫遊屋宗二ノ作也 宗二林氏名逸永正文の比乃人
也 西三条内府実隆云丹也子也

本草卷之上 終

全明大...

...

